



吉川弘文館
2,640円(税込)
刊行日 2023年7月

人物叢書 中田 薫

北康宏 (大学文学部教授) 著

中田薫と聞いて、その学問業績や学界貢献について想起できる人は稀であろう。明治から昭和初期に活躍した法制史学の創始者、東京帝国大学法学部教授である。私がそんなマニアックな人物の伝記を書きたいと思った契機は、学生時代からその学問に心底魅せられていたからである。

昭和初期に文学部にも出講し、当時学生だった古代史の坂本太郎や中世史の石母田正に決定的な影響を与え、今日に至る日唐律令比較研究、荘園制研究、封建制研究などの潮流を作った。従来への支配者目線の日本歴史を、歴史のなかで生き抜く無名の個人の営みから捉えなおした。江戸時代の民衆の結婚・離婚・借金などを描く『徳川時代の文学に見えたる私法』はその代表作である。日本民法を編纂した梅謙次郎から学んだ自由法観念のうえにドイツ歴史法学を応用した研究方法で、同期生の柳田國男の学問にも双子関係にある。中田がいなかったら、戦後の日本史研究の道程は全く異なった残念なものとなっていたらどう。

彼の堅実な研究生生活を基礎づけた学問愛は、学問への不当な弾圧との戦いとしても表出する。若くして日露戦争末期の戸水事件に参加し、澤柳事件・瀧川事件など大学の自治を脅かす政府介入では文部大臣に直談判するなど中心となって向き合い、親友の吉野作造とともに昭和初期の左翼学生運動や軍部右翼の大学干渉と戦った。他方、権威を嫌い、学士院恩賜賞や名誉教授をあっさり辞退、戦後最初の文化勲章に選ばれた際も断りかけたが、同期の松本系治や義兄吉田茂の説得で嫌々受けたという偏屈である。その人生のすべてが「学問」への献身であった。学術会議問題に象徴される学問への政治介入が問題となる今日、こういって「学問の自由」「大学の自治」の歴史を、本書を通じて多くの学生に知ってもらいたいと願っている。

著者より



サンエムカラー
1,650円(税込)
刊行日 2023年7月

安中市と同志社をつなぐ

本井康博 (元大学神学部教授) 著

同志社は昨年(二〇二三年)七月十七日に群馬県安中市と連携協力を定を結んだ。本書は締結記念として当日、出版したものである。締結式は安中市で催され、式後に朝原宣治氏(オリンピック陸上競技メダリスト)と並んで、私が記念講演「安中と同志社の史的連鎖」を披露した。本書執筆の狙いは、協定締結に至った両者の史的交流を明示することにある。これまでの交流の主流が文化(教育・宗教)領域であったのは、起点の新島襄に由来する。神田で生育した新島は父親が安中出身ゆえに血縁的には上州系江戸っ子である。

一方、地元の安中では、新島が洗礼を授けた湯浅治郎(有田屋当主)が最大の功労者である。近親者や子どもたちを十人前後、同志社に送ったばかりか、新島の生前、社員(現理事)として同志社の経営に従事したうえ、新島死後は京都に転じて二十年間、財務を無給で担当した。

安中教会設立、新島記念会堂の建設、柏木義円を始めとする同志社からの歴代牧師招聘にも尽力した。湯浅家は戦後には安中へ新島学園を創設し、湯浅八郎(治郎の五男)を同志社総長のまま理事長・校長に迎えた(詳細は拙著「新島学園ものがたり」参照)。

ちなみに湯浅家縁の総長は、八郎を含めて四人に及ぶ。かつて京都と安中をつなぐ中山道が物と人の流れで賑わった以上に、協定締結を契機にさらなる諸種の領域で交流が活性化され、シン・中山道が構築されることを願う。

著者より

※著者の所属・職名は執筆時のものです。



フィルムアート社
3,080円(税込)
刊行日 2023年4月

クイア・シネマ
かんねのゆうか
菅野優香 (大塚アキラハル・スティーブ・ライオン研究科教授) 著

19世紀末に誕生したその瞬間から今日にいたるまで、映画は、家族や子ども、恋愛などを描きつつ、ジェンダーとセクシュアリティのテクノロジーとして発展してきました。こうしたテクノロジーであり装置として存在し続けてきた映画を、ジェンダーやセクシュアリティの規範性を批判的に問い直す「クイア」の視点から考えたのが本書です。もともと「奇妙な」「いっふう変わった」という意味であったクイアという語は、後に(主に男性)同性愛者を指す侮蔑語として使われますが、それが大きな変化を遂げるのが、1990年前後です。当時、エイズ・アクティヴィズムと学術研究を通して再定義された「クイア」は、規範性を問う視座として広がっていききましたが、映画もそのひとつでした。クイア理論は、それまでの映画のあり方を批判的に見る方法を教えると同時に、映画にはまだまだ探求されていない大きな可能性の領域があることを示してきたといえます。

『クイア・シネマ』は、過去10年間に雑誌や共著書などに書いてきた文章を大幅に加除修正し、書き下ろしの3本を加えて一冊の本にしたものです。映画作家と作品、スターと観客といった、映画研究ではおなじみの分析対象だけでなく、映画祭や映画運動、LGBTQをめぐるアイデンティティやコミュニティの形成についても論じています。本書を入り口として、クイア・シネマの豊かな批評生や実験性の一端に触れていただけることを願っています。

著者より



ナカニシヤ出版
2,640円(税込)
刊行日 2023年5月

昭和歌謡と文学の季節
いぬくぼ つよし
井口貢 (大学政策学部教授) 著

歌謡曲に限ったことではないが、昭和レトロブームである。ただ私がこんな本を書いてみたいと思ったのは、ブームに迎合したわけでは決していない。およそ30年前に、岐阜市の大学に勤務していたころ、地元放送局からの依頼で「いぐちみつぐのランプリング・ミュージック」という冠番組を持たせていただいたことが、実は動機の遠因となっている。その概略をいえば、私が偏愛するフォークソングやJ・ポップを一曲紹介し、それを手掛かりに地域社会や世相を語るという構成であった。わずか20分弱の番組であったが、すべてプロデュースも私に任せられた。

その初回にかけた曲が、高石ともやとザ・ナターシャペンンの「街」であった。本書ではこの曲のことを「永いあとがき」のなかの「地名の出ない京都ソング」という項で取り上げている。1975年(昭和50)に京都市民まつりのテーマソングとしても歌われたこの曲に、当時大学生だった私は得もいえぬ新鮮な魅力に惹かれた。有体のご当地ソングは、時として固有名詞で胡麻化すことで羊頭狗肉となる。しかし、高石によるこの歌詞は、普通名詞しか出てこない。詞が詩となつてその行間を駆けて昇華し、曲が編曲によつて変容する。そして一人の歌手の唄が唱となって、そして歌い継がれていく。その化学反応がスタンダードトナバーをつくる。それは必ずしも、一夜限りの時代の寵児になる必要はない。大衆文化の存在形態のひとつである歌謡曲が、そのとき人文知の一端を想起させて時代を超える。そんな想いの中で紡いだのがこの拙著である。

著者より



清文堂出版
12,100円(税込)
刊行日 2023年6月

△日常▽のなかの近世
—ある小さきものの物語—

にしおか なおゆき
西岡直樹 (大学文学部名誉教授) 著

一七世紀後半の紀州・和歌山城下に、一人の男が生きていました。紀州藩家老三浦為時・為隆に仕えた家臣で、名前は石橋辰章(一六四二〜一七〇一)、主君が時から下された名は「生菴」。

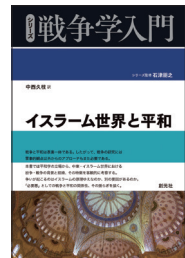
彼は「生「大事件」というものに出会うことなく、「平穩」に「近世」という時間を生き、還暦の前年にこの世を去りました。「歴史学」の上では、「名もない」一人の男です。本書は、この男が遺した十七冊の日記から、彼の「日常」をみつめた、六つの論文と一つのノートから成っています。

私が歴史学の中でこだわりつづけてきたのは、「人が日々を生きる」とはどういうことなのかという問いです。しかし、戦後歴史学は、長い間、「一人一人の日常」などは「意味のないこと」として扱うことをしませんでした。けれども、私たちは、「日々」を生きていきます。それはほんとに、それほど「意味のないこと」なのでしょうか？

たとえ「大所高所」に立つ歴史家から「身边雑事の歴史」と擲筆されても、その一人の「幸福」をみつめ、その意味を問いたい。そして、彼が求めたはずの「幸福」の姿から「近世の「日常」」さらに「近世社会」というものを照らしかえたい。

これが、本書がめざした課題です。ほんとうに「ささやかな試み」ですが、もしよろしければ、この「小さきものの物語」にお付き合いください。

著者より



創元社
2,640円(税込)
刊行日 2023年6月

イスラーム世界と平和

なかじ きよすえ
中西久枝 (大学院グローバル・大学院イノベーション研究科教授) 著

本書は、パレスチナ問題、シリア内戦やイエメン内戦、アフガニスタンでのタリバン政権復活など中東イスラーム世界での紛争や戦争、さらにはイスラームとジェンダー平等の問題や中東の民主化と経済発展など、当該地域で起こっているダイナミックな動きを読み解くための一助となることを目指している。戦争学シリーズの一冊として出版するお話をいただいた当初は、日本に馴染みのない戦争学という言葉に違和感を覚えた。でも戦争と平和は表裏一体であることは中東でのフィールドワークを通じて痛感してきた。欧米や日本のメディアでテロリストと命名しがちであるタリバンやハマスに与する人びとが、ふつうに家庭や社会生活を営み、貧困や生活難にあえぐ人びとに対して福祉活動を行っていることを現地で知った。また、昼間は畑を耕し、夜は特殊部隊の戦闘員となって生活の糧を得ている話を聞く機会もあった。中東イスラーム世界の人びととの触れ合いによって、テロリストと普通の人の境界線はどう引けばよいのか、という問いを長年温めてきたが、それを本の一部で紹介できてよかったと思う。本書は、2022年2月中旬から半年間大学からいただいた在外研究期間に執筆したものである。ロンドンのホスト大学に到着して6日後に始まったウクライナ戦争の衝撃を戦争学のメッカと言われるイギリスで感じ取りながら、情報戦や心理戦といった非常常戦が軍事支援を正当化している現実にも疑問を感じながら執筆したのを今も覚えている。日ごとに混沌としていく世界のなかで、将来を切り開いていく若い人たちにぜひ読んでいただきたい。

著者より



NHK出版
1,023円(税込)
刊行日 2023年7月

Z世代のアメリカ

三牧 聖子 (ミツカキ セイ子)
NHK出版 編集局長
著

アメリカのZ世代(1990年代半ば〜2010年代序盤生まれ)は、「例外主義」を放棄した世代ともいわれています。アメリカは、世界でも豊かで、民主主義を成功させた例外国家と自負してきました。しかし、Z世代はこうした「例外主義」を共有していません。彼らが見てきた過去20年間のアメリカは「テロとの戦い」を遂行し、日本円で880兆円を費やし、世界で40万人を超える市民を犠牲にしました。戦争に多額のお金を使う一方で、国民の社会保障の充実を怠ったために、コロナ危機では先進国では異例の感染死者数を出しました。

本書では、Z世代の支持を集めてきた民主党のバーニー・サンダース議員を大きく取り上げています。サンダースが掲げてきた国民皆保険や奨学金ローンの免除は、「社会主義的」、さらには「極左的」と批判されてきましたが、セーフティネットの拡大や格差の是正は、あらゆる人間の命が守られる社会を実現する上で不可欠の政策です。そのような主張が極左扱いされ、格差が放置されてきた今までのアメリカ政治こそが異常だったとみるべきではないでしょうか。Z世代のサンダース支持の背景には、公正な社会への彼らの強い希求があります。

現在、中東のガザで起こった戦争を背景に、改めてZ世代に注目が集まっています。イスラエル支持が強いアメリカにあって、Z世代のパレスチナ支持は他世代に比べて突出しており、ここにも正義や公正さを重視するZ世代の価値観があらわれています。今後のアメリカ、そして世界平和の行方に関心を持つ方に、ぜひ手に取っていただきたいです。

著者より



英宝社
3,080円(税込)
刊行日 2023年6月

イギリス湖水地方におけるアーツ・アンド・クラフツ運動

白井 雅美 (ウツ井 雅美)
大文字文学部教授
著

風光明媚なイギリス湖水地方にアーツ・アンド・クラフツ運動の軌跡が残されていることはあまり知られていない。この十九世紀に興った工芸美術運動は、湖水地方の重要な文化遺産なのである。

産業革命により機械化が加速して粗悪な工芸品が大量生産されたことへの反動として興ったアーツ・アンド・クラフツ運動は世界に広まり、英国内においては工芸美術を学ぶ学校が産業都市に次々と創設され、教育を受ける機会が無かった労働者階級の若者や中流階級の女性たちの学び舎となった。湖水地方にも、この地に移り住んだジョン・ラスキンの影響下で、ギルド、学校、訓練所が設立され、多くの工芸美術作家、建築家、作家、景観設計家、そして起業家が輩出された。

湖水地方の特徴は、工芸、建築および造園に必要な鉄鉱石、スレート、銅、黒鉛、花崗岩、木材などの自然資源の豊かさにある。さらに、産業革命で成功した中流階級の人々が移り住んだり余暇を過ごすため、この地に屋敷を建てたり、改装したりして競い合った。同時に自然を借景とした造園も盛んになる。そして、博愛主義運動に携わった中流階級の文化人や実業家たちは、湖水地方で貧困にあえぐ農民たちのために工芸技術を学ぶ場を作り、その工芸品を商品化した。彼らの経済的自立を促した。また、家具工房やラスキンレース工房が興り、新たな世界が構築された。このように、湖水地方は独自のアーツ・アンド・クラフツ運動の舞台となった。本書では、その軌跡をぜひいただきたいと思う。

著者より



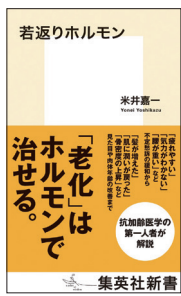
幻冬舎
1.034円(税込)
刊行日 2023年7月

断断を乗り越えるための
イスラム入門

内藤 正典 (ないうち まさのり)
(大学講師・ロバート・カレッジ・イェルサレム)
著

世界でイスラム教徒との衝突が起きるたびに暗澹たる想いがする。本書を上梓して数か月後、ガザでイスラム勢力のハマスがイスラエルを攻撃して、イスラエルが猛反撃を開始し、ガザの住民に途方もない惨禍をもたらした。テロや戦争が起きて、一方の主役がイスラム組織である場合、イスラムという宗教そのものに暴力性があるから共存できないという人が確実に増えている。だが、考えてほしい。イスラム教徒は、世界におよそ20億人。世界の人口の4人に1人と反目し、戦うことなど不可能なのである。ならば相手を知り、無用な対立を避けなければいけない。イスラムというのとはとも商人の宗教であり、交易を通じてあつという間に世界に広がった。そして、この宗教は禁欲を無理強いせず、人生を「生きやすい」ものにする知恵であふれている。欧米諸国ではこういうことを知ろうとしない。他方、守るべき対象とする女性や子どもが殺された時には、イスラム教徒の激怒を抑えることはできない。暴力の芽はそこにある。2012年、同志社大学では、アフガニスタンから政府とタリバン、双方の代表を呼んで平和構築会議を開いた。それから十年、米軍は撤退し、タリバンは再び政権の座についた。女子教育など問題が山積する政権だが、それでも同志社に来たことで、自分たちの目は世界に開かれたと、今でも話しているそうである。

著者より



集英社新書
1.056円(税込)
刊行日 2023年8月

若返りホルモン

米井 嘉一 (よない よしひこ)
(大学生産科薬学専攻教授)
著

私がアンチエイジングの言葉を知ったのは、1999年です。2000年に日本抗加齢医学会の前身である抗加齢医学研究会を立ち上げ、神奈川県川崎市の日本鋼管病院でアンチエイジングドックを始めました。私自身がデヒドロエピアンドロステロン(DHEA)とメラトニンが不足していることがわかり、それ以来、継続して服用しています。私は、新しい療法が登場した時は、自分自身で試してみようという主義です。問題なければ、次に家族に使います。アンチエイジングドックで診断し、必要に応じて処方してきました。そして四半世紀が経過、これらのホルモンをまとめた本を出す夢を追い続け、研究のために大学教員となり、多くの方々の協力を得て、ようやく出版にこぎつけました。これらのホルモンについて学ぶことは大変重要です。健康寿命の延伸、公的医療費の削減のために是非とも活用して欲しいです。大切なことを勉強しない医療従事者や研究者は不作為だと思えます。嬉しきことに不作為の医師は増えつつあります。2020年3月、メラトニンが小児期の発達障害に伴う入眠障害に医薬品として保険適応になりました。認可には臨床データの蓄積が必須ですが、これは「医師主導による臨床試験」によって成し遂げられたのです。それまでは、海外から薬監証明手続きを経て輸入するか、実験用試薬を服用していました。メラトニンを必要とする多くの子供たちと親にとって福音となりました。さあ、次はDHEAの番です。

著者より



彩流社
4,400円(税込)
刊行日 2023年8月

ロバール・ルパージュと
ケベック
神崎舞 (大学プロパル
地域文化学部准教授) 著

ロバール・ルパージュは、カナダを代表する演出家であり、劇作家、そして俳優である。「映像の魔術師」との異名を持つほど、映像の使用に長けており、視覚に訴える舞台の演出は、国境を越えて多くの観客を魅了してきた。演劇だけでなく、バレエ・ダンスのシルヴィ・ギエムと共同制作した作品に加え、サーカス集団シルク・ドゥ・ソレイユやメトロポリタン・オペラなど、演劇というジャンルを越えた作品の演出を手掛けてきたこともまた、ルパージュの多才さを物語っている。日本や中国の文化を取り入れた作品も発表しており、これまでに日本でもしばしば上演されてきた。

本書は、日本語で記されたものとしては初めてとなるルパージュ作品に関する研究書である。彼の作品の中でも、カナダの文脈を重ねた『ロミオとジュリエット』や、戦後の広島から着想を得た『太田川七つの流れ』、さらに一人芝居の『アンデルセン・プロジェクト』や『8087』などを分析対象としている。すべての作品を網羅しているわけではないものの、年代ごとの傾向の一端を掴めることに加え、国際的に活躍するルパージュの舞台表象と、生まれ育ったフランス語圏ケベック州との関連を見出すことができる。先行研究はもちらんのこと、一般公開されていない資料や、ルパージュ本人及び制作者とのインタビューなども参考にすることで、新たな視点を加えることを目指した。ルパージュとの3回にわたるインタビューの翻訳も本書に含まれている。

著者より



東京大学出版会
5,720円(税込)
刊行日 2023年9月

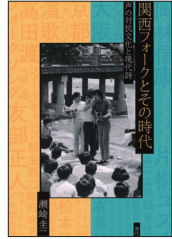
バルカンの政治
月村太郎 (大学政策学部教授) 著

本書は、バルカン地域について、19世紀から現在までの政治的な動きをたどったものである。アガサ・クリステイーの『オリエント急行殺人事件』では、最初の事件がユーゴスラヴィア領内を走る車中で起こる。乗客は、事件が生じた場所がバルカン地域であることに危機感を募らせる。実際の歴史においても、冷戦時代終了直後に発生したユーゴ内戦などにより、バルカン地域は西欧的な「文明」から遠く離れた場所とされてきた。

本書では、バルカン地域の近現代政治史を、イギリスの歴史家エリック・ホブズボームに従って、「長い19世紀」「短い20世紀」、その後の時代に区分して紹介している。長らくオスマン帝国の統治下にあったバルカン地域では、西方から金銭経済とナショナリズムが波及し、「長い19世紀」の間に独立が次々に達成された。バルカン諸国は、「短い20世紀」の間に、程度の差こそあれ、いずれも非民主的な政治を経験してきた。

EUやNATOの東方拡大の波が押し寄せ、「民主化」が進む現在のバルカン諸国は、鳥瞰的には、いずれも等しく「西欧化」の過程を歩んでいるかのように見える。しかし、当たり前のことながら、国境を超えれば、異なる政治が展開されている。バルカン地域と一括りにせずに、小国の政治を少し丁寧に追いつつ、ネットの映像や画像の助けも得ながら、彼の地で何が起きてきたか、起きているかについて思いを馳せることも、なかなか楽しい知的作業である。本書がそのガイドブックになれば幸いである。

著者より



青弓社
3,080円(税込)
刊行日 2023年10月

関西フオークとその時代
声の対抗文化と現代詩

瀬崎圭一(大学文学部教授) 著

同じ文学部の同僚と戦後若者文化についての勉強会を行い始めたことが本書執筆の出発点となった。日本において大きな若者文化となったフオーク・ソングと現代詩が接点を持っていたこと、そして、その関係性が特に関西において強かったことから、このテーマは関西の大学で日本近現代文学を教える私のものとなった。

そのような学問的関心の一環として本書を執筆してはいるのだが、その背景には自分の個人的な経験がある。一〇代どころ、古今東西の詩を読み漁り、同時に一九六〇年代の米英のロックやフオークに関心を持っていたことである。本書を執筆するまでもとにも聴いたことのなかった関西フオークは、それ故にすんなりと自分の中に入ってきた。そしてフオークが民衆の歌であるのと同じように、一般の方にも読んでもらえるような書き方に努めた。

この本の主人公は、詩人であり京都精華大学名誉教授であった故片桐ユズル氏である。本書を読み進めていくと、片桐氏が、詩壇の中に自閉して難解になってしまった現代詩を、若者たちと共にフオークを通じて再生しようとした運動の軌跡がまず明らかになるだろう。さらに、その運動を担った人物や場に、同志社の関係者やその周辺が大きく関わっていたことも見えてくるだろう。そのような意味で、本書は同志社の現代史の一側面を写し取っている。

片桐氏が亡くなられたのは本書刊行直前のことだった。本書を通じて、関西フオークを支えた片桐氏のことを少しでも知っていただければ幸いです。

著者より



武威野書院選書
2,200円(税込)
刊行日 2023年10月

定本新島八重伝
個儼不羈の女

吉海直人(女子大学特任教授) 著

今からちょうど十年前前、NHKの大河ドラマで「八重の桜」が放映された。その折、大河本として『新島八重 愛と闘いの生涯』(角川選書)を出させていただいた。たまたま新島八重の稀少な懐古談が手元にあったことで、他に先駆けて本をまとめることができたからである。従来知られていなかった板カルタのこと、大島正満との交流、八重の和歌の収集など、それなりの成果もあったが、なにしろ資料不足によっておおよそ伝記とは程遠いものになってしまった。

幸い大河ドラマの影響で、その後多くの八重関係資料が発掘・報告されたので、そういった新出資料を逐一拾い上げていった。こうしてちょうど十年経過したところで、もっとも多くの資料を用いた、できるだけ詳しい伝記として出版した次第である。今回の本の特徴は、できるだけ見出しを多く付け、短いまとまりでつなぎ合わせていることである。

また八重周辺の人物にも広く目を向けている。夫の新島襄はもちろんのこと、兄の寛馬や前夫の川崎尚之助にもかなりスペースを割いている。大河の折は「ハンサムウーマン」という言葉が話題になったが、今回は八重のことを「個儼不羈の女」として紹介してみた。「個儼不羈」は新島襄の好きな言葉であるが、それをあえて教えずにはなく妻の八重に当てはめてみた。決定的外れだとは思わないが、いかがであらうか。

これを機に、あらためて新島八重について知っていただければ幸いです。

著者より